

河川・流域(10) (3-A-10-4~3-A-12-1)

本セッションは、内分泌かく乱物質(環境ホルモン)を研究対象とした発表が6件(実環境における調査事例が4件、生物分解と毒性測定を実施した研究が2件)であった。

実環境の調査事例としては、宮城県保健環境センターの高橋紀世子氏が、「宮城県河川中のアルキルフェノール類と排出追跡調査の一事例について」と題して、ゴム関連品を製造する工場の協力の下に、この工場から排出される4-tert-オクチルフェノールの削減への努力を実施している状況について報告した。また、広島大学大学院工学研究科の磯部祥江氏が、「自動車起源 NP (ノニルフェノール) 及び NPEO (ノニルフェノールエトキシレート) の環境への影響」の研究成果として、路上粉塵や道路付近大気中のタイヤ起源 NP は比較的少ないが、路上粉塵中の NPEO はタイヤからの放出が強く示唆されることを発表した。宮城県保健環境センターの大金仁一氏は、「バイオアッセイを用いた内分泌かく乱作用の環境調査事例について(第1報)」において、宮城県内の河川でエストロゲン活性を測定した結果について報告し、発生要因の絞り込みおよびその低減対策に言及した。更に、北海道環境科学研究センターの永洞真一郎氏は、「人畜排泄物に起因するコンタミネーションに関する研究」として、下水処理場放流水や畜産排泄物のエストロゲン活性を測定した結果を報告した。

産業技術研究所/中国科学院生態環境研究中心の張氏は、「Behaviour of catabolic genes and change in microbial community structures in natural water microcosms during Nonylphenol Ethoxylates (NPEOs) biodegradation」において、NPEO の分解とこれに関与する微生物群集の解析を実施している結果を報告した。また、徳島大学大学院人間・自然環境研究科の渡部美佳子氏は、「防腐剤パラベン類の水環境動態と水棲生物に対する影響」と題して、メダカビテロジェニン、ヒメダカの急性毒性、甲殻類の遊泳阻害、藻類の生長阻害を測定した結果、および下水処理場での除去能の測定結果を報告した。

本セッションは、最終日午前中のお昼前に実施されたこともあり、会場には50名程の参加があるに過ぎなかったが、質疑応答では比較的活発な議論があった。

(京都大学大学院工学研究科附属・流域圏総合環境質研究センター 清水 芳久)